

思春期におけるブロン乱用患者の1例

東京女子医科大学医学部精神医学講座

モリナガ ヨリタカ カワノ マサヒコ オオシモ タカシ タカハシ ヒトシ イシゴウカ ジュン
森永 頼鷹・河野 仁彦・大下 隆司・高橋 一志・石郷岡 純

(受理 平成28年2月8日)

A Case Report of 'Bron' Abuse

Yoritaka MORINAGA, Masahiko KAWANO, Takashi OSHIMO,
Hitoshi TAKAHASHI and Jun ISHIGOOKA

Department of Psychiatry, School of Medicine, Tokyo Women's Medical University

In Japan, "Bron" is the trade name of a cough medicine that contains codeine phosphate, methylephedrine hydrochloride, and other ingredients. Bron causes a state of euphoria, sometimes resulting in its abuse. In 1989, the chemical manufacturer selling Bron removed methylephedrine hydrochloride from the liquid formulation of Bron (methylephedrine hydrochloride was not removed from the tablet formulation of Bron). Since that regulation, the total number of Bron abusers has decreased in Japan, and recently, few reports have described the clinical course in the treatment of Bron abuse. We conducted a therapeutic intervention for a 16-year-old girl who repeatedly took an overdose of Bron in order to calm her mind. Complex psychological factors were associated with the development of drug abuse in this case. Understanding the background of drug abuse was thought to be critical for the treatment of this type of patients.

Key Words: Bron abuse, methylephedrine, codeine, cough medicine

緒 言

ブロンとは、市販鎮咳剤のことであり、剤型は錠剤と液剤がある。その成分として、メチルエフェドリン、ジヒドロコデイン、クロルフェニラミン、カフェインを含有する¹⁾。ブロンは、人によっては多幸福感や陶酔感をもたらすため、しばしばその乱用が問題となってきた²⁾。そのため販売メーカーは、乱用や精神症状の原因とされていたメチルエフェドリンをブロン液から除去する措置をとった（錠剤においては、メチルエフェドリンは除去されなかった）。そうしたところ、その年をピークとしてブロン乱用は減少傾向を示しており³⁾、近年においては、ブロン乱用に関する報告はほとんどなされていない。今回我々は、漠然とした不安感が生じた際にブロン錠剤の乱用を繰り返した症例を経験したので報告したい。ま

た、本症例の報告に関して個人情報の取り扱いに十分に注意し、報告の主旨に影響がない範囲で若干の修正を加えた。

症 例

患者: 16歳, 女性.

主訴: 気分が不安定になってブロンを乱用してしまふ。

既往歴: 小児湿疹.

精神医学的遺伝負因: 否定.

生活歴: A県で出生, 生育。同胞3名中第1子。父親は歯科医で、裕福な家庭に育った。小学校は公立、中学は私立にすすみ友人は少なかった。吹奏楽部に所属し中学2年までは活動的に過ごしていた。中学3年生時から不登校となり、通信制の高校に進学した。現在は両親と兄弟との5人暮らしである。

現病歴：X-5年(小学5年)頃より不眠を自覚し、インターネットの検索で知りえた情報から市販の花粉症治療薬(抗ヒスタミン薬)を睡眠目的に服用するようになった。X-4年(小学6年)より受験勉強のために学習塾に通い始めたが、同時期からクラスでいじめにあうようになった。以後は不登校で自宅に引きこもるようになり、市販の花粉症治療薬を睡眠目的に使用することを続けていた。その後は中学受験に熱心な母との間で意見が食い違うこともあり、情緒の不安定さが目立つようになり苛立って手首を自傷するなどの行動が増えてきた。心配した母に連れられX-4年10月(小学6年)、A病院を受診するも通院をすぐに自己中断した。X-3年4月に希望であった中学校に進学し、入学後は吹奏楽部に入学し部活動に励むなど精神面は安定しており学校生活を楽しんでいた。また、その間は自傷行為や睡眠目的の花粉症治療薬の服用も認めなかった。X-2年10月(中学2年)頃、友人との関係が悪化した頃から学校を休みがちになり、中学3年に進学すると同時に不登校となった。再び自宅に引きこもる状態となり、不眠、朝の倦怠感が持続したため、X-1年10月、B病院を初診した。うつ状態の診断で通院を開始したが、同年12月、不安感が強まった際にインターネットで「風邪薬のブロンを飲むと気持ちがリラックスする」という記事を見つけ、薬局で市販の風邪薬を購入し、服用するようになった。次第に内服量が増え、同月に80錠程のブロンを過量服用し、C病院に搬送された。しかしその後もブロンの乱用は続き、「気分が落ち着くからやめられない」と家族に訴えたためX年3月当院を初診し、同月当科に入院した。約3週間の入院治療を行い、退院となったが、退院後すぐにブロンの乱用を再開し、苛立ちや情緒の不安定さが目立つようになり自傷行為を繰り返した。そのためX年Y月当科第2回目の入院となった。

入院時現症：年齢相応の女性であり、整容や礼節は保たれている。意識は清明であり、幻覚や妄想は認めない。漠然とした不安感、意欲の低下の訴えはあるものの、興味関心の低下や食欲低下、睡眠障害は認めない。ブロンの乱用については「ブロンを飲むと気持ちが落ち着くからやめられない」と訴え、ブロンの使用に対する強い欲求や衝動を認める。ブロンの反復的な使用の結果、入院を余儀なくされ、学校を欠席するなど社会的な障害もきたしている。また、希望の効果をj得るため、ブロンの摂取量は徐々

に増大しており、過去にブロンを中止しようとする努力の不成功が認められる。

血液検査所見：肝機能、腎機能などの生化学的検査および甲状腺ホルモンなどいずれも異常所見なし。

脳波検査所見：10~12 Hzの α 波が主体である。 α -blokingあり、Hyperventilation(過呼吸)でbuild upなし、Photoc stimulation(閃光刺激)でdrivingなし、明らかでないかん波なし。

頭部CT検査所見：異常所見なし。

ウェスクラー成人知能検査(Weschler Adult Intelligence Scale: WAIS-III)：言語理解97、作動記憶88、処理速度84、知覚統合72。言語理解は平均に相当。言葉を操ることが得意で、じっくりと考えて言葉を尽くして説明することに優れる。一方で視空間的な情報把握や、とっさの判断が苦手である。

文章完成法テスト(sentence completion technique: SCT)：家庭や学校で自身の居場所がないといった不安が強く表れ、失敗を極度に恐れ、解決行動は回避されている傾向が認められる。

入院後経過：入院後「イライラする、ブロンを飲みたい」と訴え、手首を自傷するなどの行為を認めた。情緒を安定させる目的でバルプロ酸ナトリウムを開始した。また、入院後ブロンを中止したところ、微熱、全身倦怠感が生じたが、これらは4日間で消失した。血液検査所見では異常所見は認めず、ブロンの離脱症状が疑われた。第30病日頃より自傷行為の頻度が増えるようになり、外泊中に自宅を抜け出し、ブロン錠80錠を過量服用した。情動面の安定化を目的に第45病日からクエチアピンを開始した。本症例においては、本人の能力よりもやや高い母の要求水準が背景にあり、自分に自信が持てず、学校や家庭内での環境や状況に適応できない際に情動面の不安定さが目立ちやすい傾向があった。そういった際の葛藤処理行動、対処行動が花粉症治療薬の乱用やブロン乱用につながっていたと考えられたことから、動機づけ面接を行った。自己像の形成過程である思春期において、受験の負荷や両親の期待に応えたいという思いなど様々な心理的要因が誘因となり情緒の不安定さをきたしており、入院中は面接を繰り返し、心理的葛藤を言語化できる場面を設けることを心掛けた。また、母との面接も重ね、患者への接し方を省みられるように援助し疾病の特性についても繰り返して説明した。第54病日にクエチアピンを200 mgに増量し、次第に情動面も安定し自傷行為や

外出中のブロン乱用も認めなくなったため第72病日に退院となった。

考 察

これまでのところ、依存症治療に関して、確定的なエビデンスが得られている薬物治療はない。一方で、心理的介入に関しては、今回我々が行った動機づけ面接法が一定のエビデンスがある。患者が間違った方向に行った際、面接者が無理に誘導するのではなく、対象者に寄り添いつつ、軌道修正する援助をしていくのが動機づけ面接である⁹⁾。薬物依存症患者にも有効であるとする報告がなされている^{9)~9)}。本症例では、入院当初の面接では「ブロンをやめたい気持ちはあるが、その一方で、ブロンを内服すると、気持ちがすっとする」と発言していた。その後、面談の中で、ブロンを内服することのメリット、デメリットを本人に列挙させた。すると、「ブロンを飲むことで一時的にすっきりするが、あくまで一時的なものであり、後悔がおしよせる」「今後もブロンを内服することで依存が強くなりやめられなくなることに恐怖を感じる。だからブロンはやめたい。」と、ブロン乱用へのデメリットを自ら述べ、最終的にブロン乱用を認めなくなった。

一般的に依存には、精神依存と身体依存があるとされる。この症例ではブロンの服薬量が徐々に増えている点、苛立ち、発汗等の離脱症状が生じている点より、身体依存が形成されていると判断できる。一方で、「だめだとわかっている、どうしてもブロンを飲みたくなる」「いつもブロンのことを考えている」という渴望感の存在は、精神依存の存在を示している。石郷岡らは、我が国のブロン乱用患者44例に関して詳細に報告している¹⁰⁾。44症例のうち33例はブロン液からメチルエフェドリンが除去された1989年より以前の症例、11例はそれ以降の症例であり、いずれも液剤、錠剤乱用の症例が含まれている。報告によると、ブロン乱用には幻覚妄想を呈する群(幻覚妄想群)と、抑うつ、苛立ち、不安を呈する群(気分障害群)があるとされている。幻覚妄想群は、ブロン中止後速やかに症状が消退する、乱用期間が短い、ブロン使用量が少ない、離脱症状は少ないなどの特徴を示し、主としてメチルエフェドリンの関与が示唆されている。一方で、気分障害群では、身体依存が生じる、使用期間が長期、使用量が多い、離脱時の自律神経症状はモルヒネ、ヘロインなどの離脱症状に類似しているといった特徴を示し、これらの特徴には主としてコデインが示唆されている。

本症例は、ブロン使用後、幻覚妄想状態にはならず、苛立ちや情緒の不安定さといった感情動揺が生じているため、石郷岡らの報告の中にある、気分障害群に分類される。離脱症状が認められ身体依存が生じている点も、気分障害群の特徴と一致する。

ブロンは違法薬物や危険ドラッグなどと異なり、価格も安価であり購入には年齢制限もないため未成年者でも簡単に購入できるという問題点もはらんでいる。そのため今回の症例では退院後に再度渴望感が出現した際にブロン購入に結びつかないようにするためには、依存の形成やそれらがもたらす身体的な副反応、危険性について繰り返し説明し、本人自身の疾病の理解を深める必要があった。薬物の乱用や依存を引き起こす背景には様々な心理的要因が関与しており、特に今回のような思春期の症例では単なる物質の使用障害としてとらえるのではなく、患者の根底にある心理的な問題を十分に把握する必要があると思われる。

結 論

思春期におけるブロン乱用患者の治療的介入において苦慮した1例を報告した。薬物の乱用や依存を引き起こす背景には様々な心理的要因が関与しており、それらを十分に把握し治療に反映させる必要があると考えられた。

開示すべき利益相反はない。

文 献

- 1) 宮武良輔, 土井朋子, 伊達健司ほか: ブロン液L乱用の臨床研究. 日本アルコール・薬物医学会誌 37 (1): 67-74, 2002
- 2) 福田修治, 佐々木順子, 鈴木二郎: 鎮咳薬乱用に関する社会精神医学的考察. 日社精医学会誌 6 (2): 159-169, 1998
- 3) 村崎光邦, 吉田芳子, 石郷岡純: 市販液状鎮咳剤の乱用・依存に関する臨床精神医学的研究. 「厚生省精・神疾患研果報 薬物依存の成因及び病態に関する研究 平成元年度」, pp123-129 (1990)
- 4) 原井宏明: 動機づけ面接. 精神科治療 30 (1): 105-110, 2015
- 5) 原田隆之: 物質使用障害とアディクションの治療に関するエビデンス. 精神科治療 28 (増刊): 52-58, 2013
- 6) Polcin DL, Bond J, Korcha R et al: Randomized Trial of Intensive Motivational Interviewing for Methamphetamine Dependence. J Addict Dis 33 (3): 253-265, 2014
- 7) Satre DD, Delucchi K, Lichtmacher J et al: Motivational interviewing to reduce hazardous drinking and drug use among depression patients. J Subst Abuse Treat 44 (3): 323-329, 2013
- 8) Sussman S, Sun P, Rohrbach LA et al: One-year

outcomes of a drug abuse prevention program for older teens and emerging adults: Evaluating a motivational interviewing booster component. *Health Psychol* **31** (4): 476–485, 2012

- 9) **D'Amico EJ, Osilla KC, Hunter SB**: Developing a Group Motivational Interviewing Intervention for Adolescents At-Risk for Developing an Alcohol or Drug use Disorder. *Alcohol Treat Q* **28** (4): 417–436, 2010
- 10) **Ishigooka J, Yoshida Y, Murasaki M**: Abuse of "BRON": A Japanese OTC cough suppressant solution containing methylephedrine, codeine, caffeine and chlorpheniramine. *Prog Neuropsychopharmacol Biol Psychiatry* **15**: 513–521, 1991
-